

『ニコラス・ニクルビー』と『坊っちゃん』  
——漱石作品におけるディケンズの影響を追って——

日本大学非常勤講師 大前 義幸

1. Of the monstrous neglect of education in England, and the disregard of it by the State as a means of forming good or bad citizen, and miserable or happy men, this class of schools long afforded a notable example. (5)
2. Although any man who had proved his unfitness for any other occupation in life, was free, without examination or qualification, to open a school anywhere; although preparation for the functions he undertook, was required in the surgeon who assisted to bring a boy into the world,... these Yorkshire schoolmasters were the lowest and the most rotten round in the whole ladder. (5)
3. 文学は吾人のテストの発表である。即ち好悪を表すものである。今吾人が世の中に住み、好悪を投げ出して外物に附着する其対象を数え立つれば、無数にして、之を数ふるだけでも吾人のテストの変遷を知ることが出来る程である。(中略)吾人は之を Positive と Negative との二つに分ける。Positive はテストの一面即ち自分の好きな方面を表す、一言にして云へば満足を表す文学である。(中略)第一は自分の厭やなものを正面より攻撃する男らしき発表、ヂツケンスが悪人を描くには此筆鋒にてまともに手ひどく当たつてゐる。  
(『漱石全集』第二十五巻、「文学談話」、160)
4. 一に来るのは正面憎悪である。作中人物の醜、悪、劣を暴露して、如何にも醜、悪、劣なるが如くに感ぜしむるのを云ふ。必ずしも彼は醜なり、彼は悪なり、彼は劣なりと云ふ必要はない。たゞ醜、悪、劣の内容を列挙して、しかく感ぜしめれば宜い。ヂツケンスは此方法を用ひる。但しヂツケンスは自己の憎悪を充分に發揮せんが為に、一点の取るべき所なき醜悪漢を描き出して、不自然の痕を残すことが多い。又其評価方が外圧的で厭気を生じさせる。  
(『漱石全集』第十五巻、「文学評論」、スキフトと厭世文学、245)
5. おれ見たような無鉄砲なものをつらまえて、生徒の模範になれの、一校の師表と仰がれなくては行かんの、学問以外に個人の徳化を及ぼさなくては教育者になれないの、とむやみに法外な注文をする。そんなえらい人が月給 40 円で遙々こんな田舎へくるもんか。(265)

6. 此頃愛媛県には少々愛想が尽き申候故どこかへ巢を替へんと存候。(中略)貴君の生まれ故郷ながら余り人気のよき処では御座なく候。  
(『漱石全集』第二十二巻、「書簡」、87)
7. 松山中学の生徒は出来ぬ癖に随分生意気に御座候間、可成きびしく御教授相成度と在候。又地方の人情は怜悧の代わりに少しも質朴正直の事無之候間、是亦御含み置成[度]候。  
(『漱石全集』第二十二巻、「書簡」、104-5)
8. 挨拶をしたうちに教頭のなかがしと云うのが居た。これは文学士だそうだ。文学士と云えば大学の卒業生だからえらい人なんだろう。妙に女のような優しい声を出す人だった。もっとも驚いたのはこの暑いのにフランネルの襯衣を着ている。いくら薄地には相違なくっても暑いには極ってる。文学士だけにご苦勞千万な服装をしたもんだ。しかもそれが赤シャツだから人を馬鹿にしている。あとから聞いたらこの男は年が年中赤シャツを着るんだそうだ。妙な病気があった者だ。当人の説明では赤は身体に薬になるから、衛生のためにわざわざ誂らえるんだそうだが、入らざる心配だ。そんならついでに着物も袴も赤にすればいい。(266)
9. 私も寄宿生の乱暴を聞いてはなはだ教頭として不行届であり、かつ平常の徳化が少年に及ばなかったのを深く慚ずるのであります。でこう云う事は、何か陥欠があると起るもので、事件その物を見ると何だか生徒だけがわるいようであるが、その真相を極めると責任はかえって学校にあるかも知れない。だから表面上にあらわれたところだけで嚴重な制裁を加えるのは、かえって未来のためによくないかとも思われます。かつ少年血氣のものであるから活気があふれて、善悪の考えはなく、半ば無意識にこんな悪戯をやる事はないとも限らん。でもとより処分法は校長のお考えにある事だから、私の容喙する限りではないが、どうかその辺をご斟酌になって、なるべく寛大なお取計を願いたいと思います。(315-6)
10. 実に今回のバツタ事件及び咄喊事件は吾々心ある職員をして、ひそかに吾校将来の前途に危懼の念を抱かしむるに足る珍事でありまして、吾々職員たるものはこの際奮って自ら省りみて、全校の風紀を振肅しなければなりません。それでただ今校長及び教頭のお述べになったお説は、実に肯綮に中った剴切なお考えで私は徹頭徹尾賛成致します。どうかなるべく寛大のご処分を仰ぎたいと思います。(317)

11. The face of the old man was stern, hard-featured and forbidding; that of the young one, open, handsome, and ingenuous. The old man's eye was keen with the twinkling of avarice and cunning; the young man's, bright with the light of intelligence and spirit. His figure was somewhat slight, but manly and well-formed; and, apart from all the grace of youth and comeliness, there was an emanation from the warm young heart in his look and bearing which kept the old man down.

However striking such a contrast this may be to lookers-on, none ever feel it with half the keenness or acuteness of perception with which it strikes the very soul of him whose inferiority it strikes the very soul of him whose inferiority it marks. It galled Ralph to the heart's corn, and he hated Nicholas from that hour. (37)

12. 'To go with you — anywhere — everywhere — to the world's end — to the churchyard grave,' replied Smike, clinging to his [Nicholas's] hand. 'Let me, oh do let me. You are my home — my kind friend — take me with you, pray.' (162)

13. 小説を作るにしても、文章を作るにしても同じことだ、サツカレー如きは其様云ふ事を心得てるから、拙な感情に訴える方を為なかつと思ふ。ヂツケンスは之に反して物を精一杯に進んで書く人である、だから滑稽的になる、其れも可笑しいことを云ふ方で成功しているが、泣かせる方では其様に云ふのは失敗し易い、ヂツケンスの人を泣かせるは、殊更にする様に思ふ、殊更に泣かせる為に、色々の事件を構へたり、文章をこしらへてつくっている、此れも釣り込んで読ませれば可いが、釣り込まれる先に此の程ではないと思ふ感が先づ起る、サツカレーなどは人を泣かせる場合でも多くは一頁と続けて居らぬ、二三句で済して終うので其方が或る場合は反つて有効である。

(『漱石全集』第二十五卷、「談話(現時の小説及び文章に付て)」、120)

#### Works Cited

- Dickens, Charles. *Nicholas Nickleby*. Ed. Mark Ford. 1838-39; Oxford: Oxford UP, 2003.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. London: Chapman and Hall, 1892.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. London: Penguin, 1972.
- Pyle, Kenneth. "Meiji Conservation." *Modern Japanese Thought*. Ed. Bob Tadashi Wakabayashi. Cambridge: Cambridge UP, 1998.
- 大島カレン. 「摩擦と繋がり の源泉 : 『ニコラス・ニクルビー』 と 『坊っちゃん』 における家族」. 図書館情報大学、2003年.
- 夏目漱石. 『漱石全集』. 岩波書店、1994~2000年.
- 松村昌家. 「漱石とリットン、ディケンズ——逍遙を超えて」『文豪たちの情と性へのまなざし』. ミネルヴァ書房、2011年. 61-77.